

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 加藤 美帆 印

学位申請者 白 双竜

論 文 名

「内モンゴルにおける民族教科書に関する研究
—教科書の教育的な役割と文化的な多様性に着目して—」

【審査結果】

2022年10月13日、加藤美帆（主査）、土佐桂子、岡田昭人（主任指導教員）、青木雅浩、平野朝久（東京学芸大学名誉教授）からなる審査委員会は、白双竜氏より提出された博士学位請求論文「内モンゴルにおける民族教科書に関する研究—教科書の教育的な役割と文化的な多様性に着目して—」の審査および口述による最終試験（公開審査）を実施し、全員一致で博士（学術）の学位を授与するにふさわしい研究であるとの結論に達した。

【論文の構成】

本論文は内モンゴルにおける民族学校用教科書の記述内容の現状と変遷、およびその教育的な役割について分析と考察を行った。民族学校における教科書の記述内容について比較分析を行い、人間形成の基礎を養うべき義務教育段階用の教科書内容に込められた教育的な役割を調査、分析することを試みた。この一連の調査と分析によって、民族教科書自体が本来有すべき地域的・民族的な個性とはどのようなものであるべきかを探求した。そして、民族教科書が、地域性を保持しながらも多文化社会構築への貢献、ひいてはグローバル化社会や国際化における文化の多様性に対応できるような、児童生徒たちの知力を育成する基盤となる方向性を検討した。よって本研究は民族教科書編纂による今後の課題までを射程に入れた研究である。

本論文は以下の八章から成り立っている。

序章 問題の所在、本論の意図、本論の構成

第1章 内モンゴルにおける民族教育

第2章 民族教科書の歴史的な発展

第3章 新中国における民族教科書審査制度の成立

第4章 教科書研究の枠組みの根拠と分析方法

第5章 民族学校義務教育段階における教科書内容

第6章 「教員用参考書」および「課程標準」の分析

終章 総括、研究の成果、今後の課題

【論文の概要】

各章の内容は、以下の通りである。

序章では本論文の背景、研究目的とその方法、ならびに構成について説明されている。民族教育に関しては教育予算、言語教育政策、そしてアイデンティティ教育をめぐる研究蓄積が多くみられる。教科書は国民形成、人間形成による極めて重要な役割を果たしているため、多民族国家である現代中国においては、長年これら民族教科書をめぐる教育改革が大きな課題となっている。そこで、本論文では、民族学校の義務教育全段階における教科書の教育的・文化的な役割を分析し、民族教科書本来の目的にそった記述内容を分析することを第一の命題として設定した。

第一章では中国・内モンゴルにおける学校教育制度や民族教育の概説とその位置づけを整理し、民族教育における先行研究の現状と方向性を検討した上で、今後の課題を提示している。内モンゴルにおける民族教育に関する先行研究は、教育予算の分配、民族教育政策、言語教育政策、そしてアイデンティティ教育をめぐる研究が多く、民族教科書に関する研究はまだ十分になされていない。一方で、民族教科書を分析した先行研究においては、義務教育段階用の教科書を対象とした研究が少なく、その分析内容や研究方法にも限界がある。また、各教科書における「教員用参考書」について分析と考察した研究がほぼ見られないのも現状である。そして、民族教科書の教育的役割については、そのほとんどがマイノリティ教育とマジョリティ教育の視点からのみ論じたものである。そのため、民族学校における教科書研究では、まずは分析対象とした義務教育段階用の教科書を系統的に分析し、その教育的・文化的な役割について多文化教育の視点に帰着させて設定することが重要であるとの結論が示された。

第二章では内モンゴルの民族教科書と民族教育の歴史的な変遷の整理がなされた。中華民国および満州国における民族教育は、当時のモンゴル王公や知識人階級の人々のモンゴル地域・社会の発展を呼びかけるための文化的・政治的な影響が強かった。しかしながら、当時の民族教育運動が、社会状況や政治状況によって、支配勢力や政府から大きく制約されていたことも同時に確認された。

この点から、当時の民族教育および民族教科書における、民族文化を宣伝、継承するという教育的な役割には、当時の政治的な意向が強く反映されていることが明らかになった。新中国(1949)の成立当初、教科書編纂については「国定制」が実施され、教育を通じて各民族における国民性を涵養することが図られていた。その後の教育改革によって児童生徒の資質や能力の育成が図られると、教科書制度もまた「国定制」から「検定制」へと変更された。この教科書の「検定制」によって、各民族地域の文化的な特徴に応じた教科書の編纂が可能となることは予測されるものであった。そこで、実際の教科書内容にはどのような変遷をもたらし、また、その変遷がどのような教育的役割を果たし得たかについて、実際の教科書内容を詳細に分析、考察することが必要であるとの結論が導かれた。

第三章では新中国における民族教科書制度の変遷、およびその発展について整理・分析がなされた。新中国成立以来、内モンゴルにおける民族教科書と教科書編纂制度の変遷は、建国初期の「国定制」(1950～1986)から改革開放期による「検定制」(1986～)への改革、そして現代の改革までの各段階で変化してきた。これによって、国家との一体

感や国民性の育成が、これまでよりも一層強く求められるようになっていった。この点に関しては、民族学校における「国家統編教材」の使用が義務化された以後に編纂・刊行された教科書の記述内容について詳細に調査と分析を行う必要であるとの結論が導かれた。

第四章では先行研究における教科書研究理論およびその分析方法を概観するとともに、本論における具体的な分析方法について説明がなされた。本論文においては、教科書研究による「教科内容研究」と「教授学的研究」の方法を用いている。「教科内容研究」とは、各教科書にはどのような内容が記述されているのか、という視点から記述内容を詳細に研究するものである。本論では「教科内容研究」によって民族学校、義務教育段階用教科書にはどのような内容が記述され、その内容には、いかなる知識や文化が盛り込まれ、また記述内容がどのように変遷し、そしてどのような教育的な役割を果たしているのか明確化にすることに主眼をおいている。それらに加えて「教授学的研究」、つまり教科書がどのように用いられているのかを明らかにするという視点で本研究はなされている。

第五章では、民族学校、義務教育段階用の民族教科書による比較分析と考察を通して、記述内容の変遷とその役割が明らかにされた。民族学校義務教育全段階を、小学校段階(小学校 1～6 学年)と初級中学校(初級中学校 1～3 学年)の二段階に分けて、各段階の教科書内容の記述内容およびその記述内容による教育的な役割について比較分析と考察を行った。

第六章では、民族教科書の編纂の基準となる「課程標準」および学校現場で教師たちの教育活動で使用する「教員用参考書」の記述内容について分析と考察がなされた。具体的には、この「課程標準」と「教員用参考書」の記述内容について、各学年・各学習段階における学習内容・目標、教学の重点、および教学に関する留意点に焦点を当てて分析した上で、教科書と「課程標準」、そして「教員用参考書」の3項目の関連性と相互作用について検討を行った。

本章の調査と考察によって民族学校、義務教育段階用の教科書による学習資質や能力の育成については、初等教育段階では、児童たちの語学力による基礎知識を身に付けることを重視することをはじめ、学習意欲、興味関心を養成することを目的としていることが明らかになった。また初級中等教育段階においては、生徒自身による問題発見と、その問題を解決する主体的な学習能力の育成と向上が重視されていることが分かった。「国家統編教材」の義務化により教科書内容にも大きな変化があったことが確認できた。

次に、「課程標準」に関しては、民族教科書における教育的な役割として、民族性や国民性、および多文化教育に関する役割をも果たすべき内容として推奨されていることが判明した。実際の教科書内容では、多文化教育に関する内容の記述はほとんど見られないことが明らかになった。

終章では、本論文の各章のまとめ、および本論で明らかになったこと、さらに民族教科書編纂における今後の課題を提示した。

本論文では民族教科書問題を、記述内容の変遷と教育的な役割に帰着させながら検討を行ってきたが、今後は、これら民族教科書の記述内容や叙述の構造、教学内容の難易

度などの問題を、学校教育の中心である児童生徒の視点に焦点を当てて、「児童生徒の認識発展」という観点から、学習過程に関連づけて分析し考察していくことも必要であると言えよう。

また、本論文は、教科書、「課程標準」、そして「教員用参考書」の3項目に関する分析と考察に留まっており、今後の調査においては、教科書編集者や出版社、学校現場の教師や教育者、教育の主体である児童生徒たちとも連携し、学校現場での半構造化インタビュー調査などを通じて、民族教科書における現状と課題を再検討することが必要不可欠であると考えられよう。

【審査の概要】

本論文に関する公開審査は2022年10月13日（木）10時00分から約2時間をかけて対面（公開審査）で実施された。審査委員会の構成員は、加藤美帆（主査）、土佐桂子、岡田昭人（主任指導教員）、青木雅浩、および外部審査員として東京学芸大学の平野朝久氏（東京学芸大学名誉教授）の5名であった。審査では、はじめに著者から本論文の概要や主旨についての説明がなされ、その後各審査委員との間で質疑応答が行われた。

本論文は以下の点において高い評価を得た。まず、内モンゴルでの民族教育について、中国による「国家統編教材」の使用が強化されたことでおこった変化を、教科書の記述内容や挿絵の比較分析から明らかにしており、民族教育の実際のあり方を具体的に描き出すことができている。内モンゴルの民族教育のおかれた歴史的な背景および政治状況を巨視的な視点で俯瞰しつつ、同時に学校現場で、民族教育のおかれた実情を浮かび上がらせることに成功している。また、清末以降の中国、および日本との関係を言及しながら、学校教育制度および教科書の審査制度がどのような変遷をたどってきたかが詳述されており、現在の民族教育を考察する上で、学術的に厚みのある議論になっている。内モンゴルの民族教育におけるカリキュラムおよび教育方法を、「課程標準」「モンゴル語教科書」「教員用参考書」の三点の資料を用いて分析した点も、授業実践を枠づける複数の資料を実際に検討している点で高く評価できる。

以上のようにこれまで研究が少数に留まっていた内モンゴルにおける民族教育に光を当て、教科書の記述内容、課程標準、教員用参考書といった複数の資料を用いた詳細な検討をおこなったことは、民族教育に関する学術的研究の発展に貢献するものであると言える。

他方、問題点としては以下の点があげられた。

教科書分析で「多文化教育」のカテゴリーに分類されるものはなかったという結論だが、多文化教育がどのように定義され、また教育的に位置づけられているのかについての検討が不足しているのではないか。本論文の主題となっている民族教育と多文化教育がどのような関係にあるかについても議論がなく、民族教育が本質主義的なとらえ方になっているようにも読めるという指摘がなされた。

また研究方法である「教授学的研究」について、先行研究にもとづいてより丁寧に確認する必要があると指摘があった。教科書内容の数量化した分析は、分類の妥当性や実際の授業時間との関係が不明であり、再検討の必要がある。また、課程標準、教員用参

考書を検討対象としたことは評価できるが、それらと教科書の記述とを照合したより詳細な検討が必要である。

内モンゴルがおかれた 20 世紀前半の状況についての記述が概説的内容にとどまっております、歴史研究の最新の知見についての目配りが不十分である点も指摘された。

公開審査においては、以上の点を中心に指摘がなされたが、白氏からは一つ一つの質問に詳しい回答がなされた。新型コロナウイルスの感染拡大以後、渡航がままならないなかで、資料収集の努力を重ねてきたこと、および学校現場での教授実践の検討を今後は実現したいと考えていることが説明された。分析の課題については、どのようにそれらを克服していくか具体的な回答があり、今後の研究における改善や発展が期待されるものであった。総合的には本論文が学位論文としての独自性をもっており、本学の博士学位論文の評価基準を満たしていることが認められた。

公開審査終了後、論文審査および最終試験の結果から、審査委員会は全員一致で、提出された論文が本学の博士論文としての水準を十分に満たすものであると評価し、博士（学術）の学位を授与することが適切であるとの結論に達したことをここに報告する。